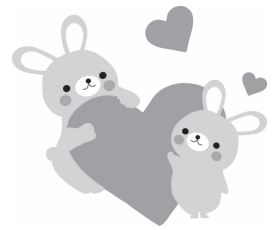


あなたと関係のある“がん”があります



ウイルス感染でおこる子宮けいがん

ウイルスの感染がきっかけでおこるがんの1つに子宮けいがんがあります。子宮けいがんは、HPV（ヒトパピローマウイルス）の感染が原因と考えられています。HPVは女性の多くが“一生に一度は感染する”といわれるウイルスです*。感染してもほとんどの人は自然に消えますが、一部の人でがんになってしまうことがあります。

現在、感染した後にどのような人ががんになるのかわかっていないため、感染を防ぐことががんにならないための手段です。

* HPVは一度でも性的接触の経験があればだれでも感染する可能性があります。

子宮けいがんできつまないために、できることが2つあります

①今からできること

日本では、小学校6年～高校1年相当の女の子を対象に、子宮けいがんの原因となるHPVの感染を防ぐワクチンの接種を提供しています。HPVの感染を防ぐことで、将来の子宮けいがんを予防できると期待されています。

②20歳になったらできること

HPVワクチンを受けていても、子宮けいがん検診は必要です。2年に1度、検診を受けることが大切です。

HPVワクチンの効果

HPVの中には子宮けいがんをおこしやすい種類のものがあります。HPVワクチンは、このうち一部の感染を防ぐことができます。そのことにより、子宮けいがんの原因の50～70%を防ぎます*。

*ワクチンで防げる種類のHPVが、子宮けいがんの原因の50～70%を占めます。ワクチンで、がんになる手前の状態（前がん病変）が実際に減ることが分かっています。がんそのものを予防する効果を実証する研究も進められています。

HPVワクチンのリスク

多くの方に、接種を受けた部分の痛みや腫れ、赤みなどの症状が起こることがあります。筋肉注射という方法の注射で、インフルエンザの予防接種等と比べて、痛みが強いと感じる方もいます。

ワクチンの接種後、まれに重い症状*1が起こることがあります。また、広い範囲の痛み、手足の動かしにくさ、不随意運動*2といった症状が報告されています。ワクチンが原因となったものかどうか分からないものを含めて、接種後に重篤な症状*3として報告があったのは、ワクチンを受けた1万人あたり5人です。

ワクチンを合計3回接種しますが、1回目、2回目に気になる症状が現れたら、それ以降の接種をやめることができます。接種後に気になる症状が出たときは、まずはお医者さんや周りの大人に相談してください*4。

*1 重いアレルギー症状（呼吸困難やじんましんなど）や神経系の症状（手足の力が入りにくい、頭痛・嘔吐・意識の低下）

*2 動かそうと思っていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと

*3 入院相当以上の症状などが含まれていますが、報告した医師や企業の判断によるため、必ずしも重篤でないものも重篤として報告されることもあります。

*4 HPVワクチン接種後に生じた症状の診療に係る協力医療機関が都道府県ごとに設置されています。

ワクチンの接種を希望する場合は

小学校6年～高校1年相当の女の子は、ワクチン接種が公費で受けられます。現在、日本で使われているワクチンは2種類あり、病院や診療所で相談してどちらか一方を接種します。ワクチンの種類によって接種の間隔が異なりますが、どちらも半年～1年の間に3回接種を受けます。接種には、保護者の方の同意が必要です。

出典：厚生労働省リーフレット「小学校6年～高校1年の女の子と保護者の方へ大切なお知らせ（概要版）」より

詳しくは、[市ホームページ](#)をご覧ください ▶▶▶

【問い合わせ先】市子ども家庭支援課 ☎ 31-1381

